

「富士に学べ」



令和 7 年 10 月 10 日

『令和 7 年度全国学力・学習状況調査結果』

4 月 15 日（火）、17 日（木）に、中学 3 年生を対象に、国語・数学・理科の全国学力・学習状況調査が行われました。文部科学省や教育委員会、学校が、生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図ることが目的です。

この調査は、「教科に関する調査」と、生活習慣や学習環境に関する「質問紙調査」で構成されています。「教科に関する調査」では知識・技能、思考力・判断力・表現力等が、相互に関係し合いながら育成されるものという現行学習指導要領の趣旨を踏まえ、基礎知識と活用力を一体的に問うように構成されています。

☆本校の調査結果と課題☆

1 国語

【国語（学習指導要領の内容）の平均正答率（%）】

学習指導要領の内容	富士中	全国（公立）
言葉の特徴や使い方に関する事項	47.2	48.1
話すこと・聞くこと	47.2	48.1
書くこと	55.6	52.8
読むこと	61.2	62.3



【令和 7 年考察】

国語では、「書くこと」において、全国の平均正答率をやや上回る結果となりましたが、「言葉の特徴や使い方に関する事項」、「話すこと・聞くこと」、「読むこと」において全国平均を下回る結果となりました。

個別の問題を見てみると「発表のまとめの内容をより分かりやすく伝えるためのスライドの工夫について、どのような助言をするか、自分の考えを書く」問いや『一 榎木の実』に書かれている場面が、『二 釣の話』には書かれていないことによる効果について、自分の考えとそうように考えた理由を書く」問い、「手紙の下書きを見直し、修正した方がよい部分を見付けて修正し、修正した方がよいと考えた理由を書く」問いに対して無解答率が高く、県・国の正答率に比べ、5 ポイント近く下回っていました。しかし、「ちらしの読み手に向けて、今年の特展の工夫について伝える文章を書く」問いに対しては、県・全国の正答率に比べ 3 ポイント近く上回っているものもありました。全体的に適切なものを選択する、登場人物の設定の仕方を捉える項目に対し、正答率が 80%を超えるものもありました。

このことから、「文章と図、意見と根拠など、情報と情報の関係を捉えて内容を理解する力や適切なものを選択する力」は高いと言えますが、「自分の考えを分かりやすく伝える」「根拠をもとに自分の考えを説明する」項目において課題があると言えます。

よって、学習指導要領で示されている「思考力、判断力、表現力等」の 3 つの力の中で表現力を高め、語彙を豊かにしていく必要があります。

今後は、文章の内容を捉えるだけでなく、読み取った内容から自分自身がどう考えるのかなどを書いたり、話したりと表現する授業をしていきます。さらに、培った知識をもとに自分の考えを伝えたり、文章を書いたりして、表現力を高めていけるような授業をしていきます。



2 数学

【数学（学習指導要領の領域）の平均正答率（%）】

学習指導要領の領域	富士中	全国（公立）
数と式	51.0	43.5
図形	51.6	46.5
関数	53.8	48.2
データの活用	62.7	58.6



【令和7年考察】(数学のつづき)

数学では、「数と式」「図形」「関数」「データの活用」の全ての領域で全国平均を上回る結果となりました。「数と式」の領域においては、全国平均を大きく上回り、基本的な計算力や知識・技能、文字式を目的に応じて変形し、その意味を読み取る力が付いています。平均正答率を見ると、全体的には高い水準にありますが、各問題の正答率や無回答率を見ると課題がありました。各問題において、「データの活用」の領域にある「確率を求める問い」と「不確定な事象の起こりやすさの傾向を捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する問い」については、県・全国平均を下回り、確率の単元に課題があることが分かります。また、「事柄が常に成り立つとは限らないことを説明する場面において、反例をあげる問い」も県・全国平均を下回りました。一方で、無回答率は多くの問題(12/15問)で県・全国の平均より高く、特に、問題解決の方法や事象を数学的な知識や表現を活用して説明する問題に関しては、顕著に高まりました。(無回答率3割超)このことから、多くの領域で基礎的な知識や技能が身に付いている生徒の割合が高い反面、基礎の定着が不十分な生徒が一定数いると考えられます。また、数学的な見方や考え方はたらかせて、既習の知識や技能を活用し、数学的に説明する力に課題があることも明らかです。

今後は、仲間との対話を通して学習内容の定着を図り、数学的根拠を基に説明する活動を多く取り入れ、思考力や表現力を高める授業を展開していきます。



3 理科

全体としては、22問中18問で全国平均と比較した正答率(以降、正答率)より高い結果が出ました。領域別正答率では、生命領域でやや低めでしたが、地球領域と苦手意識をもちやすいエネルギー、粒子領域については高めとなりました。評価観点別正答率では、思考・判断・表現の問題について高めとなり論理的思考を重視している授業が功を奏したと感じる反面、知識技能の問題は平均より低めとなり基礎・基本の定着に課題があることが結果に表れました。

問題形式別正答率では、記述の問題は高めとなった反面、選択式の問題はやや低めで、判断の材料となる知識や技能に課題があることがうかがえます。また、難易度の低い問題での正答率が低く、無回答率も高めの傾向があり、理科に苦手感を持っていたり、学力に不安を感じていたりする生徒が多いと言えます。今後は、グループでの対話的活動を通して、学習内容の定着と学力の底上げを図り、より論理的思考力を高め、また、科学に興味を向ける生徒が増えるような授業を目指します。

4 生徒質問紙から

- 授業の時間以外に1時間以上学習する人は全体の平日が約64%、休日が約68%であり、令和6年度とほぼ同様でした。令和7年度前期の学校評価では「授業の内容が理解できている」の項目で「できている」「まあまあできている」と回答した生徒の割合は約86%であり、学校外での学習にも裏付けられていると推察されます。また、「先生は、授業やテストで間違えたところや理解していないところについて、分かるまで教えてくれる」の項目では約87%の生徒が「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答しています。一方、「1, 2年生に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなど工夫した」と回答した生徒は約55%にとどまっています。「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることがある」と回答した生徒は約83%であったため、学級の仲間と協働的に学び合う機会を授業の中で作り、課題解決に主体的に取り組み、学んだ内容や自らの考えを表現できる授業を生徒と共に作っていきます。
- 「将来の夢や目標を持っていますか」は約69%の生徒が「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」と回答しています。また、「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」には約70%が「相談できる」と回答しています。生徒たちにとって安心安全な環境を整え、キャリア教育の充実を図ることで、自分の将来と向き合う場面を意図的に設けていきたいと考えます。
- 「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」は約97%、「人の役に立つ人間になりたい」は約97%、「人が困っているときは進んで助けていますか」は88%の生徒が「当てはまる」「どちらかと言えば当てはまる」に回答しました。また、約87%の生徒が「自分にはよいところがある」、約95%の生徒が「先生は、あなたのよいところを認めてくれている」と回答しています。多様な他者を価値ある存在として認め、他者の立場や考えを尊重しつつ、予測不能な社会でよりよく自己実現できる力を、これからも育てていけるようにします。